

研究テーマ：帝王切開分娩における子宮復古現象に関する指標づくり－評価基準一般化の試み－	
研究代表者（職氏名）：准教授 下見 千恵	連絡先 (E-mail 等) : sitami@pu-hiroshima. ac. jp
共同研究者（職氏名）： 助教 藤井 宏子 佐々木 貴美江（県立広島病院 産科病棟 師長） 住吉 史子（県立広島病院 産科病棟 助産師） 石井 智子（県立広島病院 産科病棟 助産師）	

[研究の背景]

産褥期の復古現象の中でも子宮復古は形態的にも大きな生理的变化であり、健康促進のための看護ケアを決定する上で重要な観察項目である。帝王切開後の子宮復古は一般的に経膈分娩より遅れることが知られている。経膈分娩における子宮復古状態については明確にされ、アセスメントのための指標が定着しているが、帝王切開分娩後の子宮復古についての研究は極めて少なく、基準化に至っていない。子宮底長は、産褥期の子宮復古を査定する場合の重要な指標の一つであり、基準作りの必要性や意義は大きい。

[研究目的]

本研究では、年々増加している帝王切開分娩後の子宮底長の経日的変化について基礎的データを得て、変化の特徴について考察した。

[研究方法]

帝王切開分娩後の褥婦を対象に、帝王切開分娩後から退院時まで、子宮底長を毎日測定した。また、子宮復古に影響する産科的因子についてデータ収集し、分析した。

分析には SPSS を使用し、子宮底長の変化には反復測定による 1 元配置分散分析、その後多重比較を行った。子宮底長と分娩週数など 2 変量感の関係には pearson の相関係数を、2 群の比較には t 検定を実施した。なお、有意水準を 5%未満とした。

倫理的配慮

事前に口頭および文書で研究協力依頼を行い、同意を得た。文書には、研究によって得られた個人情報、統計的に処理し氏名など個人が特定されることはないこと、理由の如何を問わずいつでも研究協力を取り消すことができ、また同意の取り消しによって不利益を一切被らないこと、学会発表、学会誌への投稿で結果の公表を行うこと等を明記した。なお、本研究は県立広島大学研究倫理委員会で審議され、その結果承認された（承認番号：第 10 号）。

[結果および考察]

1. 対象者の背景（表 1）

対象者 36 名のうち、初産婦は 12 名で経産婦は 24 名であった。経産婦の割合が多いことが平均年齢に関係している可能性が考えられる。正期産で分娩に至ったものが多く、早期産であった事例は 4 名で、いずれも 36 週であった。また緊急帝王切開は少なく、多くは予定帝王切開で

表1 対象者の産科的背景

	(n=36)	
分娩既往	初産12人	経産婦24人
年齢(歳)	32.6 ±4.3	
分娩週数(週+日)	38W+5d ±10.1d	
新生児の体重(g)	2915.4 ±486.7	
分娩時出血量(g)	410.8 ±247.2	
胎盤重量(g)	592.4 ±140.9	
帝王切開形態	予定27人	緊急9人

あった。帝王切開の適応は、反復帝王切開や骨盤位、高齢初産、前置胎盤であった。なお対象者に双胎の事例は含まれていない。

2. 子宮底長の変化（図1）

図1に示すとおり、子宮底長は産褥0日目の約17 cmから徐々に緩やかな下降を示し、7日目では約13 cmとなった。産褥0日目から2日目までは変化がなく3日目では有意に減少した ($p<.01$)。さらに、3日目から5日目においても変化はなく6日目に再び有意に下降した ($p<.05$)。なお、図には示していないが、1日目と比較し4日目は有意に減少した。また、同様に、2日目と5日目、4日目と7日目はそれぞれ有意に下降した ($p<.05$)。

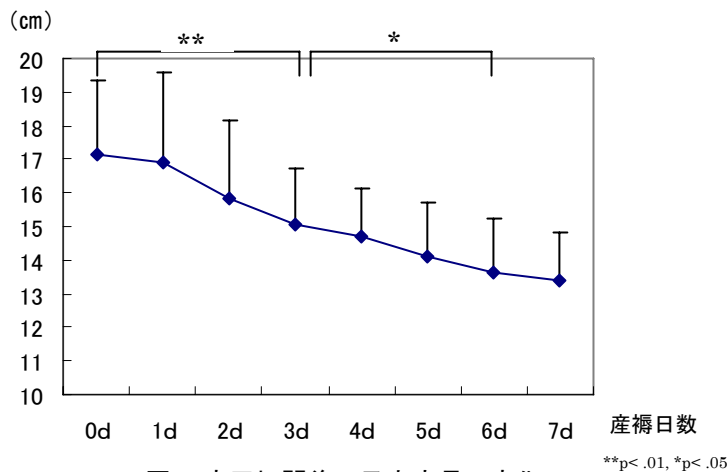


図1 帝王切開後の子宮底長の変化

つまり、子宮底長は3日ごとに明確な違いが生じると考えられ、経膣分娩における子宮底長の変化のパターンとは異なることが示唆された。経膣分娩では1日ごとに規則的に下降することがわかっているが、帝王切開後の子宮底長の下降は3日ごとに変化する引き伸ばされたパターンとなることが推測された。

したがって、復古状態を査定する際には、少なくとも前日との比較ではなく、数日前のデータと合わせて比較検討する必要があると考える。

また、標準偏差は Range1.4-2.7 と産褥日数によって幅があり、特に産褥0日目から2日目までの極めて産褥早期において大きい傾向があった。子宮復古に影響する因子として年齢、出産歴、分娩週数、胎児および胎児付属物の大きさが考えられる。このうち、年齢では産褥1日目および2日目において、正の相関が見られた ($p<.05$, $r=.42$, $r=.41$) が、その他では関連を認めなかった。本研究の対象者には双胎は含まれておらず、さらに分娩週数や新生児の体重にも極端な差はなかったことが、反映しているかもしれない。今後、特に産褥早期における個体差について、影響因子を含め分析する必要がある。

[結論]

帝王切開後の子宮底長の変化は、経膣分娩と比較し子宮復古現象が遅れるだけでなく、変化パターンが経膣分娩とは異なることが明らかとなった。帝王切開分娩では、経膣分娩より子宮復古が遅れるという従来の示唆を越え、明確な指標づくりに向けた基礎的データを示すことができた。今後は臨床での有用性を高くすることを目的に触診によるデータ等も得て、検討していく予定である。